

1 女大公アン

第一部

I

中年過ぎた女大公アンに
不吉なことが起こりました
婚姻の縛りに囚われず
アンは高貴な騎士を愛してしまいました

II

ルイス伯爵は馬術^{ひい}武術^{のろし}に秀で
恋の狼煙^{のろし}が上がれば その手管^たにも長けていました 5
でも 己の武勇を試すスリルに比べれば
女たちに惹かれるものはありませんでした

III

戦場では引き絞られた弓のように
自在に矢を射る^{つわもの}兵 ぶり 10
戦いのない長閑な時は物思いに耽り
吹く風のように自由でした

IV

ルイス伯爵の家系は
明け方に狼煙^{のろし}を見れば馳せ参じる^{ものふ}武人の血筋
けれど狡賢^{ずる}い枢密院が 罾^{のどか}を仕掛け賄賂^{ものふ}を贈り 15
ルイス伯爵と手を組みました

V

枢密院の上に立つのは女大公アン
でも アン^{のろし}の心を意のままにしたのはルイス伯爵
片方の心が冷めたとき 二人には悲しいかな
けれど アンに非はなかったのです 20

VI

女大公アンに仕えて策を練る家臣たちの中から
老クラカンが剣を捧げて進み出ました
噂話は老クラカンが忌み嫌うもの

断ち切るには 剣に劣らぬ鋭利な知恵が要りました

VII

老クラカンは女大公アンの名声と血筋を崇めていました 25
他に取り柄は無いものの
唯一あるのは 指揮を待ち
命じられたとおりに働くこと

VIII

老クラカンが目撃したのは アンの手が脇腹をピシャリと打ったその一瞬 30
けれど次の瞬間には アンは女大公らしく毅然として
ルイス伯爵と若く美しいその妻に微笑みました
貴人たちが居並ぶ席でのことでした

IX

その時 一同に
衝撃が走りました
貴人たちの羽根飾りは怯え 時計の振り子は止まりました 35
それでも 女大公アンは微笑んでいました

X

鎖に繋いだ猟犬たちをけしかけよとも
鞘に納めた剣を抜けとも命じることなく
女大公アンは たたただ
肉体のない亡霊のように佇たたずんでいました 40

XI

老クラカンは飼い犬のように唸り声をあげ
卑いやしめられた女大公を見ました
火の放たれた野を歩くように大股で
老クラカンは広間から出て行きました

XII

ドシンドシンと床を踏み鳴らし 45
立ち止まっては また大股で歩きました
復讐の卵が産み落とされでも
その雛かえが孵かえるまで 母鳥には忍耐が要るのです

XIII

怒りの雛かえが孵かえるにはまだ間があるものの
もうじき孵かえらんばかりに 沸々としていました 50
老クラカンはルイス伯爵の動向をじっと見張り

ついに好機を捉えました

XIV

反旗を翻さんと 心は荒れ
老クラカンは勇ましい笑い声をあげました
鼻はネタを嗅ぎ回り 55
舌は刺激を求めています

XV

ルイス伯爵は羽根飾りを揺らし
黒馬にまたがった一団を率いていました
ルイス伯爵は今や謀反人 60
老クラカンは立ち向かうべく 戦場へ急ぎました

XVI

両軍は相対して陣を構え
豹^{ひょう}が鉤爪^{かぎづめ}で大地を掴むごとくに
流血の日の合図を待ちました
両軍とも天の裁きを願っていました

XVII

「天にかけて 戦いをお止めください」 ルイス伯爵は叫びました 65
「正義を願わせてください
我が国は いわば自らの意思で嫁ぐ花嫁
奴隷^{さだめ}の運命を負ったことなどないのです

XVIII

「流血に飢え渴いて
剣と呪わしい惨殺を欲しているではありません 70
我らの剣は神の祝福を受けています
まずは正義を嘆願します」

XIX

ルイス伯爵は騎士道精神^{かがみ}の鑑
老クラカンは誓ったことばを信じていました
一面の枯れ野に射す星明かりを頼りに 75
戦いを止めようと駆け出しました

XX

ルイス伯爵の胸に当てた鎧の上に
震えるように瞬^{またた}く緋色の点が見えました
闇の中にルイス伯爵が駆け出したとき

敵陣から赤く燃立つ火の矢が放たれたのです 80

XXI

ルイス伯爵が駆けていく中 不吉な声が呼びかけました
老クラカンの忠義の誓いに気をつけよ
その霊は微笑んで
空中で手を振り 消え去りました

XXII

青い夜空に金色の光射す夜明け前 85
ルイス伯爵軍は鬨^{とき}の声をあげざま 凍りつきました
まるで 予言された災いが
的中したのを見るようでした

XXIII

若き奥方のもとへ急げ
ルイス伯爵の死を伝えよ 90
未亡人の頭が垂れるには
その一言で十分なはず

XXIV

老クラカンは残忍な喜びに
白いくちひげを左右にピンと引っ張りました
— ルイス伯爵自身の肩帯^{サッシュ}にやつを吊り下げれば 95
やつには親切というものだ

XXV

老クラカンの眼差しは
厳しい冬に雪の突風が地を払うかのようでした
北極熊のように
仕留めた獲物を鷲掴みにしました 100

第二部

I

女大公アンは凍りついた彫刻のように微動だにせず
司祭も夫も寄せ付けませんでした
口を結び 腕を胸の前に組み
虚^{うつろ}な目^{くろ}で空を見ていました

II

巻き紙を握る片手は 105
蛇を絞め殺すかのように強^{こわ}ばっていました
激しい情念に囚われたその姿は
女の魂そのものでした

III

巻紙には ルイス伯爵の運命^{さだめ}が 110
文字も燃えよと 切々と語られていました
アンの目に浮かぶのは ひどい嘲^{あざけり}の中
鎖に繋がれ辱めを受けるルイス伯爵の姿でした

IV

巻紙には ルイス伯爵の運命^{さだめ}が 115
アンの凝視に晒され 翻弄されてきました
愛の中の憎しみと憎しみの中の愛が
生かすか殺すか せめぎ合っていました

V

女大公アンが打ちのめされたあの日から
不吉を告げる黒星が日中に現れたこの日まで
アンの心は 火の手の上がる街に鳴り響く
早鐘のように揺れました 120

VI

ルイス伯爵の美しさ故に愛^{いと}しく
その美しさ故に憎みました
— 復讐でない これはルイス伯爵の謀反
戦いは正義 私の意志ではない

VII

愛に飢えて渴いた心を 125
みなぎる生命^{ちから}力へと導いてくれた人
愛に飢えて渴いた血を根こそぎ吸い取り
赤い血潮でこの自尊心を蘇らせてくれた人

VIII

ルイス伯爵はアンの弱りゆく心に 130
言わば 天からの新しい言葉を授けたのです
けれど伯爵は裏切り アンに残ったのは
交わした吐息の重さだけ

IX

なつかしい記憶が奔流のように溢れ出し
悪意の波に砕けて白い泡をたてました
甘い追憶を握り潰し 気持ちを奮いたたせ
理性を保とうとしました 135

X

— のたうち進むもの ^{さげす}蔑みの名で呼ばれるもの
それこそは女 — このペンで署名さえすれば
ルイス伯爵の騒ぎたてる家臣たちへの
警告ともなろう 140

XI

— 彼の家臣たちに権威の何たるかを知らしめよう
女を ^{さげす}蔑み その権威を軽んじた男たち
あの時の辛さが今の辛さを生んでいる
入れ替わり立ち替わり どちらも強く襲って来る

XII

— 女だと軽んじられたが 145
今や私は正義
女であることより 女大公であることより
今や私は正義だと 震える男どもに認めさせよう

XIII

女大公アンの気持ちは高ぶり
天にも昇らんばかり 150
けれど 女という悪魔が追ってきて
^{ゆる}赦すまいと ^{いきどお}憤ったり ^{ゆる}赦してやればと炊きつけたり

XIV

心の奥で せめぎあい渦を巻き
胸の内を吹き荒れました
それは 遥か上の天の高みで 155
天使の姿でぶつかり合うかのようでした

XV

アンは揺れる胸の内から 女の想いではなく
ひとつの明確な意志を ^{ほぐ}解し出そうとしました
女であることと女々しさを
分別に照らして区別しました 160

XVI

アンが自分を抑えられなかった時には
ルイス伯爵の運命はうまく回りませんでした
男が語る女とは
盲目的に恋に溺れ 老いてゆくもの

XVII

恋人に夢中になるあまり 165
捨てられれば 復讐の鬼婆^{おにぼぼ}
さて アンの足元にひれ伏して
嘆きの声をあげている これは誰

XVIII

ルイス伯爵夫人がベールを取って言いました 170
「女大公様 お聞きください
あなた様は夫には恐ろしい正義
でも 本当は慈悲深いお方

XIX

自分の失態は自分の責任
夫もそれを否定しはしないでしょう
すべてにおいて私は無力 175
ただ お慈悲を祈るだけ

XX

おそらく 私を妻に選んだのは
伯爵家に後継ぎを残すため
夫と心は通わず
胸の内を分け聞いたこともありません 180

XXI

夫のために私にできることはないけれど
女の想いにつき動かされて
この身の弱さを認め
女大公アン様に 跪^{ひざまず}きます」

XXII

顔を曇らせ 躊躇^{ちゅうちよ}を許さぬ厳しさで 185
女大公アンは命じました 「前へ」
「女らしさという徳は あなたの夫の家臣たちには通じよう
だが 私には一切通じない

XXIII

この場に女らしさなど要らぬもの
正義がすべてを計る場では
女の流儀で嘆願しても
一文にもなりはしない」 190

XXIV

ルイス伯爵夫人は青ざめ お辞儀をして立ち去りました
あまりにも幼稚な女の振る舞いに
嵐の中の波飛沫しぶきのように 195
千々に乱れたアンの狂気も冷めるほど

XXV

アンは長いこと座っていました
吹きつける風の中で 炎が揺らぎ燃え続けるかのようでした
— 伯爵の妻の阿呆ぶりには呆れるばかり
いや わざとそんなふりをしたのかも 200

XXVI

座り続けて アンの乱れた心の内の
嵐のような高ぶりも静まりました
— 伯爵の妻は魔女に違いない
いや よくよく神に愛されているのかも

第三部

I

老クラカンが読んだのは 205
女大公直筆の手紙
謙へりくだって 老クラカンを友と呼び
自尊心をくすぐりました

II

老クラカンの陣地へ
女々しさなどこれっぽっちも示さぬてい体の
手紙が急ぎ届けられました 210
けれど 老クラカンは馬のように踵かかとを打ち鳴らしました

III

手紙には赦免が書かれていたのです
「敵を深追いするのは好みません」
老クラカンが踵かかとを打ち鳴らす様は

地獄の悪魔が悪態をつくようでした 215

IV

女大公は書いていました 「ルイス伯爵を半ば騙し討ち」
老クラカンの深い皺が鋭く光りました
その時 冬の嵐雲が裂け
間に^{はざま}赤々と輝く空が見えました 220

V

「我らが導き手 キリスト様にかけて」と読んだとき
老クラカンの目は 拍車のように^{とが}尖りました
その時 降りしきる吹雪の幕が開き
間に^{はざま}凍りついた星が見えました

VI

「クラカンは解ってくれと信じます」 225
女大公はこう書いて
国を治めるは大義であれと祈っていました
老クラカンはいなくように笑いました

VII

女大公の手紙から 老クラカンは悟りました
女の^{うなず}頷きや目配せに隠されていたその真意を 230
雄犬は 忠犬に劣らず
女主人を慕うもの

VIII

老クラカンの^{いと}厭い破いた女というマントを
女大公はまだ手放していなかったのです
— 女大公様が見せた慈悲は 裸のあなた様を^{さら}晒してしまう 235
わしの慈悲こそ あなた様を裸にせずに済むものを

IX

頬骨に残る戦いの醜い傷を
老クラカンは乱暴にこすりました
— あの男に我らが^{大義}をじっくり味わってもらおう
我らが慈悲を見せてくれよう 240

X

「ルイス伯爵よ 枢密院が
そちの家系に敬意を払えと命じている
恩赦により 絞首刑は^{まぬが}免れた

戦って果てるがよい」

XI

一 罪多きこの身だが 245
たったひとつの徳のために死にゆこう
ルイス伯爵は言いました
一 脛もぶつかる直々の対戦で と答えました

XII

緋色の朝焼けに染まった
神なき朝が明けました 250
悲劇の主人公は明け方に「おやすみ」を言いました
土の上に血のりが見えました

XIII

ルイス伯爵夫人は明け方に
雲雀の声で朝日がうたうのを聞きました
日暮れ前には 他の雲雀が 255
星の無い闇をもたらしました

XIV

ルイス伯爵夫人は天に向かって
夫の側で眠りたいと願いました
女大公アンが老クラカンの方に振り向いた時
その顔色は死者の目のように真っ青でした 260

XV

おまえを殺してやりたいと アンは叫んでいました
神の怒りの ^{いかづち}雷 を落としてやりたい
老クラカンは榎の木のような ^{いかづ} 険い頭を振って思いました
女大公様はわしに感謝するのか殺すのか

XVI

アンの心の鎧だった自尊心は 265
ひどい痛みに引き裂かれました
生まれたばかりの赤子があげるような泣き声が
アンの胸から ^{ほとぼし} 迸 りました

XVII

アンは女大公の威厳を取り繕いました
噂を聞いたものが言うには 270
ルイス伯爵の処分が議論された時

為政者たちの意見は割れたらしいのです

XVIII

女大公アンは 嫌悪する卑劣漢
家臣の長の老クラカンの言いなりになるしかなかるうと
不正な大義を正義と信じ 275
神の慈悲に嘆きすぎるしかなかるうと

XIX

女大公アンは胸の想いを押さえつけ
女々しい口を閉ざしました
人としての声と女大公としての声が
轟く大砲のように激しく争っていました 280

XX

喉元まで迫る血の海の中を 女大公の権威が
豚のように 前脚で搔いていました
ワインの代わりに 自らの血を飲んで
辛くも浮いているありさまでした

XXI

悲鳴をあげ 血の海に沈みかけては 285
恐怖に襲われ また我に返りました
アンが老クラカンに はっきりと
ルイス伯爵への慈悲を説けばよかったものを

XXII

人としての声と女大公としての声が
ルイス伯爵の願ったことと同じであればよかったものを 290
誰もが見透かしていたその心を
覆い隠そうとした女の性に呪いあれ

XXIII

大義なき無慈悲へと突き進んだ結末は
大惨敗よりもひどい結果をもたらしました
老クラカンの復讐心がルイスの魂を刺し貫き 295
彼を格好の餌食にしたのでした

XXIV

蛆虫は 不実の輩が
宝箱の中に隠した嘘を見破るもの
たとえ善人が殺されても

神のない日などないのです 300

XXV

女大公アンはぼろぼろの旗をたたんで
折れた刀を鞘に収めました
ご覧なさい 容姿衰え生き長らえて
老婆となった女の勝利を

XXVI

ご覧なさい 樫の木のような^{いかつ} 厳い頭の老クラカンを 305
生まれながらの名誉の武者の行く末を
彼はこの国から去りました でも本当は
女大公の冷たい嫌悪の眼差しから逃げたのです

XXVII

この事件の教訓として 310
破滅の元と神の慈悲を考えてみてはどうでしょう
ルイス伯爵の遺体は墓に納められても
その行いは波うつ麦のごとく 世に広まってゆくのです

XXVIII

殺害に手を貸し それでいて 315
死の運命^{さだめ}の男の命乞いをしたアン
その数々の過ちは重いもの それでもなお
アンは女大公の体面を貫いたのです

(中島久代訳)